

平成 30 年度

当協会職員(※)による投稿論文の一部をご紹介します。論文には共著も含まれます。

執筆者 大杉智美※, 岡部海都※ 他

題 目 諫早湾干拓調整池及びその周辺における鳥類相の変化

投稿先 山階鳥類学雑誌, Vol.49, No.2, pp.109-121

要 旨 諫早湾は、かつて約 2,900ha の広大な干潟を有し、鳥類のシギ・チドリ類やツクシガモ等の国内最大の飛来地として知られていた。この諫早湾において、農業の維持、発展を図っていくために効率的な経営を可能とする優良な農地の確保、整備を主目的として、農林水産省により諫早湾干拓事業が計画された。本事業は、高潮や洪水対策の防災機能の強化も加えた国営干拓事業として 1989 年に着手、1997 年の潮受堤防の締め切りにより干潟は消滅した。以降、干潟の鳥類はみられなくなったが、締め切り後の潮受堤防内の水域(調整池という)に約 400ha のヨシ原が形成されたため、新たな開放水域やヨシ原等に多くの水鳥や草党性の鳥類が飛来するようになり、西日本最大級の鳥類生息地となって今日に至っている。現在、有明海再生の一環として、潮受堤防の水門を開門する議論が行われている。開門が実施されれば、調整池内に海水が流入し、防災面や農業、漁業に甚大な影響が生じると予測されているが、鳥類の生息地という側面についても、約 20 年かけて形成されたヨシ原等の湿地環境が失われ、希少種を含む多くの鳥類の生息地が消失、改変されることになる。本項は諫早湾干拓事業に伴う鳥類相の変遷と、現状について報告するものである。

執筆者 大庭伸也, 大串俊太郎※ 他

題 目 福江島・五島市三井楽町におけるアメリカザリガニの駆除の現状と課題

投稿先 日本環境動物昆虫学会誌, Vol.29, No.1, pp.21-26

要 旨 福江島には、近年絶滅が心配される水生昆虫類(コガタノゲンゴロウやコオイムシ、ヒメミズスマシ、ホッケミズムシ、ガムシなど)が生息する、極めて生物多様性の高い水域(ホットスポット)が複数存在する。しかし近年、外来種のアメリカザリガニが幾つかのホットスポットに侵入し、被害が最も大きな水域では水生昆虫が減少しているほか、その生息に不可欠となる水生植物が消失している状況である。そこで本研究では、ザリガニが侵入している水域にカニカゴ等のトラップを設置し、その駆除活動を行い、アメリカザリガニの減少の度合いをモニタリングした。また、水生昆虫の生息状況のモニタリングとしてすくい取り調査を行い、希少種の生息状況を把握した。さらに、アメリカザリガニに襲われたとみられるアカハライモリ、ミズカマキリ、トンボ類幼虫の怪我率も調査した。

執筆者 宮崎勝己, 望月佑一※ 他

題 目 技術開発:カイヤドリウミグモの早期発見と基礎生態

投稿先 生物科学, Vol.70, No.2, pp.95-102

要 旨 カイヤドリウミグモの早期発見に関わる「蛍光染色法」、「モノクローナル抗体法」、生態や行動観察に関わる「室内飼育法」、各地方個体群の移入経路解明に関わる「マイクロサイトマーカー開発法」の 4 項目をピックアップし、それぞれの技術の概要とそれによる成果や応用の概略を示す。

執筆者 山田勝雅, 望月佑一※ 他

題 目 カイヤドリウミグモ研究のゆくえ

投稿先 生物科学, Vol.70, No.2, pp.103-111

要 旨 カイヤドリウミグモの侵入・分布拡大に関する現在の情報を整理しながら議論を加え、現状で考えられる対策方法を考察する。